

里地通信 6月号

発行：里地ネットワーク事務局 〒105-0003 東京都港区西新橋1-17-4西新橋YKビル6階(財)水と緑の惑星保全機構内
電話：03-3500-3559 FAX：03-3500-3841 e-mail：QWS04137@nifty.ne.jp ホームページ：http://member.nifty.ne.jp/satochi/

火と草原の旅 21世紀に伝えたい三瓶の草原 放牧と野焼き、皆で参加しよう IN三瓶 報告



2000年3月19日から3月22日までの4日間、島根県大田市に近い三瓶山で、「放牧と野焼き、皆で参加しよう IN三瓶」が行われました。

主催は、地元の緑と水の連絡会議と、財団法人イオングループ環境財団および里地ネットワークで、太田市、三瓶牧野委員会、大田市保養施設管理公社が地元の後援団体として開催されました。

「21世紀に伝えたい三瓶の草原」とのサブタイトルをもつ、このイベントは、草原の野焼きを通じて、三瓶山の自然環境や農業、歴史を考えようと開かれました。

春の火の祭り～3月22日

陽の光はずいぶん暖かくなり、風もゆるんできた3月22日。三瓶山の西側、西の原は、まだ春というには少し早く、草原は一面枯れ草色におおわれていました。

山が草原地帯にかわるあたりから煙が立ち上り、赤い火がめらめらと燃え上がります。やがて火は風にあおられ、草原を黒く焼きながら道路の方に向かって渡ってきます。ときにはごうごうと音をたてて火が走ってきます。火は風を起こし、風が火を強めて、草原の風景をみるみるうちに変えていきます。

見物に来ていた人たちは、その火の熱と火が草原を走るはやすきに、なかば青ざめながら興奮しています。

この火は、火事ではありません。

人が燃える場所や勢いをコントロールしている「野焼き」です。

春の芽吹き前に、草原を焼く野焼きはかつて全国で行われていました。

しかし現在、西日本では阿蘇の久住、山口の秋吉台台地、そして、三瓶山ぐらいしか行われていません。

なぜ、野を焼くのでしょうか？

野焼きと草原

さまざまな理由が重なって野焼きが行われます。

一番大きな理由は草原を維持するためです。草原は、牛や馬の放牧地として、また、かつては採草場として人の手によって維持されてきました。採草した草は、そのまま田畑の肥料にしたり、牛や馬の餌となって、糞をたい肥にしたり、茅葺きの屋根などさまざまな生活素材として利用していました。かつては、田んぼ1枚につき5枚分の草原がないと米がとれないと言われていたのです。

雨が多く、温暖な日本では、ほとんどの草原はそのまま放っておくと木が生え、森に戻ってしまいます。そのため、畑作には向かないところでは、森にするか草地にするかの選択が行われ、あるところでは、木を植えて森の恵みをいただき、あるところでは、草原にして土地の恵みをいただいていたのです。選択の理由は、地形的、気候的、風土的な理由です。

さて、草原にすることを選んだからといって、放っておいては草原にはなりません。

日本の草原に生える主な草は、シバとススキ(カヤ)です。1年草で、地下茎などを使って毎年芽を出します。秋になり枯れた草をそのままにしておくと、翌年は、そのすき間から芽を出すこととなります。そして、だんだんと光が地面に届かなくなります。もちろん、低木なども生えてきます。

そのまま放置すると、草原として利用することができなくなります。さらに、たとえば、三瓶山では、昭和63年に草原に火がつき、周辺に燃え広がる大火となり、大きな被害がでました。草原の管理をしていなかったために、長年つもった草に観光客が使った火が燃えうつったのです。「火入れ(野焼き)を毎年していたならば、大火にはならなかった」と言われています。

もちろん、野焼きだけが草原の維持方法ではありません。人の手で草原を刈り取る方法もあります。また、牛を放牧して、草を食べさせ、草原を管理する方法もあります。

三瓶山では、さまざまな方法がとられてきました。

今、野焼きが再開され、あわせて牛の放牧も再開されました。

なぜ、野焼きなのか、なぜ、牛の放牧なのか、三瓶山の人々が自然との共生、草原との共生を模索する道を見てみましょう。

国立公園・三瓶山

三瓶山は、山全体の草原の美しさから国立公園に指定されています。

昭和40年代までは、2000頭以上の和牛が放牧されていました。牛が適度に草を食べるため、シバの草原として美しい姿を残していたのです。また、レンゲツツジやオキナグサなどの希少植物は、牛には毒があって、牛が食べないため、選択的に草原に残されていきました。そのため、レンゲツツジの美しい群落があちらこちらに見られたのです。

牛は、群れて行動します。また、糞をしたところの草は、しばらくの間食べません。そして、毎日のように場所を移動しながら草を食べます。そのため、過剰な放牧にならなければ、牛が全体にほどよく草を食べ、しかも、食べ残しや食べない草木を残すことで、草原の植生に大きな影響を与えます。希少なレンゲツツジの群落などは、牛が選択的に食べ残し続けたためにできました。

しかし、高度成長期に入る頃、昭和30年代からは、営林署が山頂部から斜面部にむかってスギやカラマツなどを植林していきました。また、昭和40年代になると、道路が整備され、交通量が増え、観光化もすすみます。牛は、三瓶山を自由に往来していたため、道路や温泉街にまで牛があらわれることとなり、放牧地が制限されてしまいました。

放牧地の制限によって、畜産農家は、餌としての効率が高い牧草を草原に植えて、狭い面積でもたくさんの牛を飼おうとしたり、これまで必要のなかった牧柵を作り、修理したりと、手間や経費がかかるようになりました。そのため、徐々に放牧が廃れていきます。

昭和50年頃には、西の原では放牧が廃れ、東の原で1軒の畜産農家だけが放牧を続けるだけになってしまいました。

その結果、草原は姿を変えていきます。レンゲツツジの群落などが減り、多様な植物も減っていきました。また、スキー場など観光利用していた草原は、多くの人手で草を刈り取るようになり、草原の維持はとても大変な重荷になっていきました。

しかも、牛がいなくなり、姿を変えた三瓶山に対し、「牛がいて美しい草原だったから国立公園に指定していたのだ。もう三瓶山は国立公園にしておく意味がない」との指摘も出されるようになってしまいました。

野焼きの復活と放牧の復活～西の原

昭和63年の大火をきっかけに、西の原では13年ぶりに野焼きが復活し、毎年3月に野焼きを行うようになりました。

さらに、平成3年頃から、かつての三瓶山の姿を復活させたいと願う動きが活発になります。お年寄りが、子どものころ、三瓶山でワラビ取りをしたり遊んだことを語り、三瓶山の頂上まで牛がいたことを思い出しました。そして、草原を維持するためには牛の放牧が欠かせないという理解も広がりはじめました。

これらの市民の声などに後押しされて、平成7年には、西の原の一部が放牧場として整備され、1戸の農家が参加して24年ぶりに放牧が復活します。平成8年には2戸の畜産農家が、平成9年には5戸の畜産農家が放牧を取り入れました。

放牧は、ただ牛を野に放すというものではありません。牛も小屋で飼われ続けていると、外に出されても足をすくませるだけですし、草を食べることも忘れていきます。また、放牧を成功させるためにはたくさんの知恵と知識が必要です。西の原の放牧が24年の空白にもかかわらず成功したのは、東の原の1軒の畜産農家が、伝統の知恵と経験や工夫により知識を持ち続けていたおかげです。もし、三瓶山に1軒も放牧をしている人がいなかったら、三瓶山に牛の姿が復活することはなかったかもしれません。

放牧は、思わぬ効果を生みました。

まず、観光客、とりわけ子ども達が喜びます。ただ草原が広がっているのではなく、そこにゆったりと草を食べる牛がいて、すぐ身近に接することができるのです。

また、先にも述べましたが、レンゲツツジなどの群落が復活しはじめました。

そして、もうひとつ大きな効果があったのです。

野焼きを楽にしてくれました。

野焼きを行うときには、「輪地切り」といって、延焼を防ぐためにまず防火帯をつくります。防火帯とは、あらかじめ一定の幅で草を刈っておき、火が防火帯に来たら、勢いを止めてそこで消火するためのものです。この作業のために大田市では予算を投じて人の手でやっていたのですが、財政難で予算がつきにくくなったことと、作業をする方が高齢化して、ただでさえ厳しい作業の担い手が減ってしまいました。

防火帯なしに野焼きはできません。99年の野焼きが

危ぶまれました。

この野焼き継続の危機に牛たちが立ち上がりました。

防火帯にするための細長い草の道の両側に牧柵を張り、その道に牛を放牧したのです。すると、牛は細長い牧柵の道を歩きながら草を食べていきました。そして、牛が草を食べることで、自然に防火帯ができたのです。

牧柵を作るコストを考えても、これまでの予算の約7分の1にまで安くなりました。この「モーモー輪地切り」によって、防火帯は無事にでき、平成10年以降も野焼きが継続されることになりました。

緑と水の連絡会議

このモーモー輪地切りを提案して、実現したのは大田市の環境保護団体「緑と水の連絡会議」です。水と緑の連絡会議は、平成4年に生協しまね大田支所の組合員らで結成されました。

会では、草原と里山の管理・維持技術の実践と啓発による二次植生の保全をテーマに、島根県三瓶山に伝わる放牧技術や炭焼きなどの生業の掘り起こしによって、農村と自然環境を保全するための活動を続けています。

西の原の放牧などにも積極的に関わりをもち、平成8年の野焼きからは、市民に野焼きの意義を理解してもらうためのボランティア参加を実現することとなりました。また、平成9年には、三瓶山で第2回の全国草原サミットを開催しています。これらの活動が、平成10年のモーモー輪地切りに結びついたのです。

さて、今回の「放牧と野焼き、皆で参加しよう I N三瓶」は、緑と水の連絡会議に加え、財団法人イオングループ環境財団、里地ネットワークが加わり、22

日の野焼きボランティア参加をメインに、4日間のイベントとして、大田市の子



ども達や大人たち、全国の自然保護や放牧畜産関係者が、三瓶山の放牧と草原について学び、知り、考える集いになることができました。

紙芝居をつくろう!

3月19日、20日の主役は子ども達。主に大田市の子どもと大人が集まり、三瓶山をテーマに紙芝居を作りました。この紙芝居は、昨年鳥海山でワークショップとして行ったもので、今回が2回目です。三瓶山の自然や暮らし、楽しいところなどを参加者が考え、書き出して、それをもとに三瓶山について考えていることや伝えたいことを絵コンテにまとめ、グループで話し合っ、ストーリーにまとめ、分担して絵を描いていきます。

この紙芝居ワークショップで、ふたつの紙芝居が完成しました。ひとつは、牛が草を食べ糞を出し、フンコロガシが糞を分解して草の養分になり、草が育ってまた牛に食べられること、牛と虫と草の共生と循環をおもしろおかしく描いたものです。もうひとつの紙芝居は、牛舎で飼われていた牛が、狭い牛舎に嫌気がさして脱走し、いつか三瓶山の放牧場にたどりつき、幸せになるという物語です。逃げた牛を追いかけた農家が、三瓶山の牛たちをみて、自分も放牧をしようと決意します。



いずれも、三瓶山の自然と人との営みを、とても素直な目で見つめ、とらえています。この紙芝居は、翌日のフォーラム、牛肉を食べよう会、野焼きで公開され、参加者に共感を持って迎えられました。すでに、大田市の図書館などいろいろなところで、公開して欲しいとの要請があります。

「21世紀に残したい三瓶山を考えよう」フォーラム

3月21日には、長崎大学名誉教授の伊藤秀三氏と財団法人自然公園美化管理財団専務理事で里地ネットワ

ーク幹事でもある瀬田信哉氏を招き、三瓶山について考えるフォーラムを開催しました。伊藤氏は、「美しい三瓶の姿」をテーマに、草原を維持する難しさとの必要性、草原の植生のすばらしさをお話しいただきました。また、瀬田氏は、「自然に聴く旅 エコツーリズム」をテーマに、自然を見るまなざしや観光と環境保全のあり方についてお話しいただきました。また、第2回の草原サミット実行委員、高橋好孝氏の司会で、会場も交えた意見交換が行われ、今後の畜産のあり方や放牧畜産を成功させるための経済的な問題、草原の自然保護と畜産など広範なテーマで語られました。

三瓶の牛肉を食べよう会

3月21日の夜には、三瓶で放牧された肉牛をさまざまな料理で食べました。三瓶山で放牧と草原が守るには、畜産農家の経済が成り立たなければなりません。畜産は、輸入牛肉の増加などでとても厳しい状態に置かれています。このままでは日本の畜産は壊滅すると言う人もいます。その中で、三瓶山の牛をまず三瓶山周辺に住む人たちが食べて、三瓶牛のファンになってもらうことが必要だと、「食べる」会が開かれました。

この食べる会に供されたのは、三瓶山で長年放牧を続けてきた川村牧場の牛です。しかも、普通牛肉として出される若い牛ではなく、8回もお産をした10歳の牛でした。年を取った牛は、加工用の肉として出荷されることが多いのですが、あえて肉としては条件の悪い牛を皆さんに食べてもらいました。

ローストビーフ、テールスープ、しゃぶしゃぶ、さいころステーキ、大根と牛肉の炊き合わせなど、10種類以上の牛肉料理がテーブルに並べられます。どれも柔らかく、10歳の牛とは思えません。何より舌に正直な子ども達が喜んでぱくぱくと食べていました。

生産者の川村さんも参加して、自分で育てた牛が、おいしい料理になっていて、みんなが喜んでるのを見て、感激されていました。

今回の、4日間のイベントは、草原を守るためには、放牧や野焼きが必要なこと、放牧畜産が成功するためには、畜産農家が経済的に維持できなければならないこと、地域の人たちの理解や地元の牛肉を食べるなどの取り組みが必要なことを、内外の人たちに強烈に印象づけました。この取り組みをきっかけに、さらなる取り組みがはじまることは間違いありません。

北竜湖畔 小菅の里プロジェクト 報告



2000年4月15日(土)、16日(日)の二日間、長野県飯山市の小菅地区で「北竜湖畔 小菅の里プロジェクト」が開催されました。主催は、財団法人イオングループ環境財団、里地ネットワーク、小菅むらづくり委員会、小菅の里協働楽舎の4団体です。

雪の残る山を刈る

「今年は雪どけが少し遅いね」

そんな地元の人の言葉を聞きながら、山道に残る雪を踏みしめて登ると、遠くからは立派な松や杉の林に見えた山には、細い木が無数に生えていて、どれも強い風と雪の重みで上ではなく横に向かって伸び、ねじれ、曲がっていました。

北は秋田県、南は兵庫県から参加した町の人、そして小菅の里の人たちは、ナタとノコギリを腰につけ、足場の悪い雪の中で、まっすぐのびることなく、お互いに邪魔し合っている木を黙々と切ります。1時間、2時間たち、昼になって一度山を下り、宿舎でご飯を食べてから、ふたたび夕方まで作業を続けます。

変わりやすい春の天気は、あいにくの雨。雪を溶かすことのない冷たい雨です。

高い交通費を出して、仕事を休み、縁もゆかりもないこの土地に遠くから来た人たちもいます。参加した理由を訊ねると「今まで、植林はしたことがありまし

た。でも、木を切ることはなかなか体験する機会がありません。木を切ることを教えていただけると聞いて、とにかく来たかったです」と、意外な返事が返ってきました。

木を切るイベント。

それは、厳しく、そして、楽しく、最後に達成感に満ちた2日間でした。

北竜湖と飯山市小菅地区

飯山市の中心を流れる千曲川を野沢温泉の方面に行く道から少し山を上ったところに小菅の里があり、三方を山に囲まれた小さな北竜湖があります。

小菅地区は、1300年の歴史を持つ小菅神社があり、新潟、長野の人々の信仰を集めています。小菅の里からみて北側の尾根の先に北竜湖があります。

北竜湖は、江戸時代、もともと早乙女池としてあったところに堤防を築き水面を広げてできた湖です。北竜湖の水は雪どけ水で、ちょうど3月の終わりから4月中に三方の山から水が注ぎ込みます。今回の作業中、どうどうという水音が湖から聞こえてきましたが、これは春にだけ聞くことができる湖へ注ぎ込む水の音です。

北竜湖の水位は4月末にもっとも高くなり、その後すぐにぐっと低くなります。北竜湖の水は、下流およ

び尾根を超えた小菅の里の田んぼや畑をうるおす大切な農業用水だからです。田植えの時期、下流の人々は一齐に、北竜湖の雪どけ水を田に引き込みます。

雪どけの水は、尾根伝いに北竜湖に流れ込むため、小菅の人々は水路がつまりないように春先はずっと見回り掃除をしています。そして、一度北竜湖に注いだ水をもう一度里の方へと下流の水路で引き込んでいきます。

北竜湖が、小菅の里の暮らしと深い関わりを持っていることを教えてくれる言い伝えがあります。

かつて小菅の里に竜ヶ池という池があり、そこに竜が住んでいました。この池の水を人々が田の水として使っていたため、やがて池の水が浅くなり、竜に近くの蓮池に引っ越してもらいました。しかし、長い年月は蓮池も浅くしてしまい、人々は困って神様に相談したところ、北の尾根の向こうにある早乙女池に移ってもらえばよいという話になりました。竜に引っ越しをお願いしたところ、竜は山をかきわけて早乙女池に移りました。その竜が通り過ぎた後は水路になり、そのため今まで使っていなかった早乙女池の水も小菅の人々が使えるようになりました。そこで、早乙女池に堤防を作って広く深い湖をつくり、竜が安心して住め、人々も水を使えるようになりました。そして、竜が住む北の湖、北竜湖と呼ばれるようになりました。

今も北竜湖は大切な湖です。その三方の山は、水を育て、人々が植林し、伐採し、薪をとり、炭を焼いた生活の場でもありました。

北竜湖畔は、毎年5月には美しい菜の花に彩られ、8月には花火が湖面を照らす湖です。山も素人目には遠くからとても美しく見えます。しかし、一步入ると、人々から忘れられ、手を入れられなくなった荒れた山であることにいやでも気づかされます。

木を切るということ

今回のプロジェクトには、KOA森林塾の主宰者で、「山の先生」島崎洋路元信州大学教授が塾生の皆さんとともにかけつけ、指導と作業の指揮をしていただきました。また、主催者でもある小菅の山仕事経験者も未経験者への指導と同時に、島崎さんに指導を受けました。

長靴や防寒具、軍手を身につけた参加者の最初の仕



事は、ナタを腰に付ける腰ひもをナタのさやに結ぶことです。ナタやさやが落ちないようにしっかりと結びつける方法を教わります。紐をこうして、ああして、結んでのばして... 2回ほど教わり、なんとかみんな縛りましたが、もう一度やることのできるかどうか...。ナタとノコギリを腰に付け、ナタの使い方など注意を受けての作業開始です。午前中は、山道を切り開くため、山道に出ている細い木をすべて切り倒していきます。20人ほどいるので、意外と早く進みます。山道が一番高くなっているあたりまで達すると、そこで一般参加者は一休み。KOA森林塾の塾生のひとりが、山道の下急な斜面に生えている大きな木にするすると登り、ワイヤーを固定します。チェーンソーを使って慎重に根本に歯をあて、ワイヤーを担当している人が少しずつ動力を使ってワイヤーをひっぱると、木は思ったところにすうっと倒れていきます。3本ほどそのように木を倒すと、ぱあっと視界が開け、山道から北竜湖が見渡せるようになりました。

「ここが展望台になります。ここからの北竜湖の眺めは実にすばらしい。これからの森林保全には景観の要素も大切だと思います」と、小菅むらづくり委員会の真島一徳さん。美しい湖の景観に疲れも吹き飛びます。

初日の午後は、山道から脇の山に入ります。いよいよ山の保全活動です。島崎さんから大体1メートルに1本ぐらいの感覚ですっと上に伸びている木を1本だけ残して小さな木はすべて刈り取ってくださいと指示を受けます。斜めに、横に生えている木を、ナタ、ノコギリ、それに剪定ばさみを使って切っていきます。午後からは、地元の3人の小学生も参加しました。3人の女の子たちは、最初はとまどっていましたが、すぐに慣れてノコギリを使って木を切りはじめました。大人も子どもも関係なく、自分たちの体力に合わせて作業をします。枝の折れる音、ノコギリの音だけが聞こえてきます。

小学5年生の子どもが切った木は、小さくても直径10センチ以上あり、20年以上経っていました。

「20年生きた木を切ったんだけど、この木を切り落とすことで、森の他の木がもっと短い時間で大きく育つことができます。君たちが大人になった後にも、森が豊かになるように今、木を切っているんだ」と説明に、子ども達も真剣に耳を傾けます。

2日目も、引き続き作業です。朝には、本格的に山を管理する上で欠かせないチェーンソーの分解修理、目立て作業について、KOA森林塾の皆さんに詳しく教わってから作業を開始しました。午後には、展望台を作った場所の上の斜面に木で数段の階段を作ったり、切った大きな木を横に置いてベンチにしたり、丸太をそのままひとり用の椅子にしました。ベンチの位置も、見晴らしを考えて据え付けます。さらには、枝で囲いを作ってその中に小枝を入れて積み上げます。本格的に春になったらおがくずを入れてカブトムシが産卵できるようにしようという計画です。ところが、この小枝を積み上げたところで、ひとりが上に乗って跳ね始めました。枝がバネの役割をして、ちょっと堅いランボリンみたいになったのです。そうしたら、子どもも大人もびよびよん跳ね始めます。山には、いたるところに遊びがあり、気持ちひとつで、仕事は遊びになり、遊びが仕事になります。みんなが楽しく跳ねたおかげで、予定よりもたくさんの枝を囲いに入れることができました。



2日目、地元の子も達さらに数名参加して、ナメコなどのキノコの種を切ったクルミの木に植え付ける作業をしました。この種木を山に戻し、来年の春を楽しみにします。

2日間の作業で、山道が開け、展望台ができ、ベンチや散策用の広場ができました。さらに、カブトムシ

の産卵場所、夏のキャンプのたいまつ用の棒100本以上、キノコの種が付けられた木100本以上ができました。

「人がたくさんいると作業も楽しいし、早いもんだ」「スキー客やゴルフ客に木を切らせてあげるサービスをお金もらってやるのか」なんて言葉が地元の人たちからこぼれます。

今回のプロジェクトをきっかけに、小菅の人自身も山に入ることをもう一度生活の中に取り入れ、そして、小菅で行われている様々な地域おこしの中に「山づくり、森づくり」がはじめられるようがんばりたいと、小菅むらづくり委員会の鷲尾恒久さん。すべての作業が終わり、閉会式を開いていたさなか、北竜湖に小さな虹がかかりました。偶然とはいえ、私たち参加者をねぎらう美しい一瞬がそこにありました。

小菅の春

初日、作業は日没よりも少し早めに切り上げ、みんな小菅の里を散策しました。小雨にけぶる山からは棚田が広がり、一段低いところにはかつて水田だった湿原が広がっています。用水路や沢には鮮やかな新緑がぼつりぼつり...ふきのとうです。幻想的な風景に、不思議な懐かしささえ感じます。

豪雪地帯の小菅地区は、農業と山仕事だけで生計を立てるのが厳しいところです。減反で放棄された水田はヨシなどで荒地になり、人口が減少する中、一時は地区が荒れました。しかし、小菅地区では、飯山市の小菅むらづくり委員会が作られ、ヨシ荒地を整備し、湿地として復元する取り組みや、小菅神社を中心に歴史と自然に恵まれた地域として多くの人に来てもらえるような様々な取り組みをしています。

幻想的な光景は、自然そのままに生まれたのではなく、小菅の人々の思いが守る生活の風景なのです。

初日の夜、交流会が宿泊場所の文化北竜湖山荘で開かれました。ここで出された料理は、ふきのとうなどの天ぷら、特産の紫米をふつうのウルチ米に混ぜて炊いた赤飯、ジャガイモの酢の物など、地場のものを使った素朴で味わい深いものばかりです。北竜湖畔に立つ文化北竜湖山荘は10人のスタッフがいます。小菅神社の神主・鷲尾隆男さんもそのひとり。この日は、神社の祭りとも重なり大忙しでしたが、地区ぐるみで小菅の里を守っていこうという気持ちが伝わってくる食卓でした。

投稿

小菅の里知る区ロード探検隊2000



小菅むらづくり委員会(長野県飯山市)
鷲尾恒久

第1回春の探検隊

〔探検だ！探検だ！4月最後の日曜日〕

少し寒く、薄曇りの4月30日。たくさん来すぎても困るし、少なくとも困るなあ、などと心配しながら迎えた日曜日。主催者の小菅むらづくり委員会6人のほか、やまぼうし自然学校の余頃友康さん、宮崎英夫さんが指導者となり、参加者は親子連れも含めての9人。全員で17人の探検隊です。

22日頃から咲き始めた桜も、寒い日が続いたおかげで、ちょうど見頃。講堂前のしだれ桜が探検隊の出発式を見守ります。この日のために作った隊員章は、桜咲く北竜湖、千曲川の菜の花、新緑の小菅神社奥社のカラー写真が入った立派なもの。パウチしたものを真島一徳委員長が参加者の首にひとりひとり掛けて、イザ、出発！

〔山岸君、石森君、小菅の里を体感する〕

まずは、南竜池自然観察園で、生き物を探す体験に挑戦です。下流にある、丸山光子さん宅の池を覗きこ

むと、いました、いました。体長2～3cmの、今年生まれたばかりのカワマスの稚魚です。この川には、こんな大きいものもいるんだよ、と丸山さんは両手を肩幅ほどに広げて見せます。

カワマスは、揚水機場の下の、川幅の広く深いところに昔から棲んでいます。餌を投げたら出てくるかな、と余頃さんがあらかじめ用意したミミズを投げてみますが、反応がありません。それでは生きているものをと、5年生の藤沢さんや市村さんはきゃーきゃー言いながら、蜘蛛を捕まえます。が、残念ながらこれにも反応なし。

そこで、少し上流に移動して、川底をザルですくってみることにしました。すると、いるいる。体長2～3cmの稚魚が、何匹も泳いでいます。1年生の石森君と3年生の山岸君、とたんに目を輝かせて、ザル貸してっ！滑って落ちそうになりながら、魚すくいに夢中です。パシャッとすくって、捕れた、捕れた！もう大騒ぎです。

こういうところにいるんだよ、と余頃さんが石を少し動かしてザルですくうと、トンボのヤゴが入ってい

ました。川底の泥をすくってみると、ヨコエビやカワニナが捕れます。この辺では、ヘイケボタルが飛びます、と言うと宮崎さんは、虫にとって川は汚れすぎではいけません、きれい過ぎてはだめなんですと解説してくれます。周辺に生えているヨシは、水質の浄化に役立っているのだそうです。

夢中になっていると、どんどん時間が過ぎてしまいます。ここで遊んでいるだけで午前中が終わってしまうよ、ということで、上流のサンショウウオの棲む場所へ移動。あらかじめ、真島さんが体長10cm以上もある成体を、捕まえておいてくれました。ほら、触ってごらん、という余頃さんの勧めに、恐る恐る手を出す5年生。ここにあるのが鰓で、水の中での生きられるし、大人になったら林の中の枯れ葉の下などに棲んでいます。両生類という仲間です、と宮崎さんの説明があります。

小石の多い川底を掻き回すと、体長4cmほどの子供も見つかりました。小さな小さなサワガニも見つかりました。そんな時、女の子達が、腕が痒いと言い始めました。見ると、水路沿いに、白い毛の生えたイラクサが生えています。知らないうちに、どうもこのイラクサに触れていたらしいのです。

次は、源流を尋ねて、桂清水へ。ここは、小菅七清水のひとつで、昔は桂の大木が茂っていたとか。それぞれ喉を潤して、しばし休憩。山際を見るとキクザキイチゲ、福寿草、カタクリ、エンレイソウなどが一面に咲き乱れています。ここで宮崎さんからクイズ。カタクリの種は、どうやって運ばれるのでしょうか。一番、鳥。二番、風。三番、自分で撥ねて。四番、蟻。さあ、何番でしょうという質問に、藤沢さん、すかさず「蟻っ」。ピンポンです。カタクリの種は米粒に似ている、米の胚芽に当たる部分に蟻の好物があって、自分の巣穴に引き込むことによって広まっていますとは、宮崎さんの説明です。

集落の一番上に、護摩堂があります。先日余頃さんが事前調査に来た時、池の中はアカガエルがいっぱいいたとかで、みんなでそっと覗き込んでみました。するとカエルは見え、あちらこちらに卵を見つけました。透明なゼラチン状の中で、すでに動いているオタマジャクシもあります。余頃さん、池の中に入ってナイロン袋ですくいあげると、赤みの帯びたオタマジャクシが泳ぎ始めました。

余頃さんの採集する姿を見ていた石森君、やおら、

おれもやりたいっ！ と、運動靴のままで池に下りていこうとします。入るんだったら石森君、靴脱いで、ズボンも脱いで、と言ってもまだ寒いので、そうもいきません。そこで石森君の足を二人で抱え、逆さになって身を乗り出し、顔を真っ赤にしてオタマジャクシを引っ掻き回すのを手助けです。水遊びが大好きな、石森君です。

【山ねずみの台所、見つけた！】

杉並木参道は、まだ杉の葉が落ちたままです。例年連休頃に行く春の道普請ですが、今年は遅れて、5月14日の予定。杉の葉を踏みながら、内山用水路まで登ります。遅れたのが、山岸君。アアアとか言いながら、足が動きません。小菅の子じゃないのか、と言われてやっと水路にたどり着きました。

この水路は、小菅の山の雪解け水を北竜湖へ運ぶためのものです。小菅のたんぼを潤すため、自然の池であった北竜湖に堤防を築いて、溜池としたのです。ですから、雪が消えてしまうと、流れる水はなくなります、という鷲尾さんの言葉に続いて、宮崎さんからは山岳修験の歴史についての説明です。

そろそろお昼も近い時間となり、山岸君、石森君の口からは、腹減ったーっ！の声。カタクリの咲く道を、どんどん進みます。ここのカタクリは見頃を過ぎた感じで、所々からイカリソウの芽が顔を出しています。例年と比べると、1週間以上遅い春です。小菅の仙人は、この草などを煎じて飲んで、空を飛んだんだ、と石森君に耳打ちすると、おれも空を飛びたいと真顔でこちらを見つめる石森君。あまり冗談も言えません。

越えん処(こえんど)の泥溜めには、日時と氏名の書かれた小さな立て札がいくつも立てられています。雪解け水が溢れて災害にならないようにと、午前と午後の2回、全戸が当番となって見回りをしています。そして、大菅の山道に入り、カタクリやキクザキイチゲ、ショウジョウバカマ、福寿草などが咲く道の真中で、待ちに待ったお昼。参加者の手作り弁当に対して、男どもはお握りだけの寂しさ。愚図をこねてやっと参加した石森君も、この時間だけは満足の様子です。

食後は、二人一組となつてのピンゴゲーム。白いもの、顔に見えるもの、アリ、黄色い花、コケ、甘いもの、くすぐったいものなどという欄が並んでいるカードを、周囲を見渡ししながら、発見した順にチェックし

ていきます。お昼のときに石森君の弁当に寄ってきたアリが、歩き出してみると見つかりません。石森君、少々不機嫌。

落ちていたクルミを拾い上げて、リスの食べたクルミだよ、と余頃さん。硬いクルミが、見事二つに割れています。藤沢さんは、石の下を覗いて、ネズミの食べたクルミの殻を発見しました。横をかじって穴を開けてあり、リスの食い方とは明らかに違います。洞窟の中に、いくつもの頭蓋骨が転がっているようです。

山道を行くと、木が何本も倒れています。枯れたもの、蔓が絡みついたもの、雪の重みで倒れたものなどいろいろです。みんながぐぐったり跨いだりしている中、おれ上る、と石森君。腹ばいになって倒れた木に上ってはみたものの、ドスンという音とともに落下。顔が真っ赤になって苦しそうな顔をするので、慌てて虫がいたと指差すと、痛い気持ちが虫のほうに動いて、泣き出すことも無くまずは一安心。フーっ、疲れる。

そろそろ歩き疲れてきたのか、山岸君とともに少し歩いては、あと何キロ? 早く北竜湖へ行って、ボートに乗りたいという石森君。今日はそんな予定じゃないよと、山岸君が言って聞かせます。休憩時間になって真島さんが、拾ってきたモミジの種を上へ投げて見せました。モミジの種は、くるくる回りながら落ちてきます。自然の不思議です。

途中、ひときわ大きく育ったカタクリに遭遇しました。腹ばいになって、アリの視点で見ると、山道はカタクリの森に変身します。そうやって写真を撮っていると、石森君、今度は馬乗りに跨ってきました。重いよっ!

[キノコ植えて、里芋植えて、秋を待ち]

北竜湖の北側では、吉原さんと真島信幸さんがクリタケの種駒打ちの用意をして、待っていました。先週実施した、小菅の里プロジェクトで整備した現場を使っての、クリタケの菌をカラマツの原木に打ちこむ作業です。ドリルを使っての穴あけは、吉原さん。藤沢さんに市村さんの二人は、慣れた手つきで種駒を打ちこんでいきます。山岸君に石森君も、危ない手つきで、金づちを使っています。そんなに振り回したら危ないよ、と市村お母さんに怒られながら。

木の枝を重ねた、森のトランポリンで余頃さんが飛び跳ねて見せると、おれもやると石森君。しばらく飛び跳ねていましたが、ドサツという音とともに、地面

で腹ばいになっています。切り株で怪我をしなくてよかったです。ほっ! というまもなく、今度は吉原さんの傍へ行って、ドリルを握っています。おれにもやらせろ、と言って聞かないんだと吉原さん。なかなか働き者です。

ここからも歩いて集落まで戻る予定でしたが、時間がオーバー気味のため、車に乗って移動。桜の花を背景に、真島信幸さんの畑で里芋の種芋植付け作業です。秋になったら、キノコを入れた芋煮で反省会をという下心です。植え付けて、寄せ書きを看板にして立てて、さてみんなで記念写真をとったら、石森君が近寄ってきません。写真はいやだというのです。すったもんだの拳句、余頃さんが捕まえてきてどうにか撮影。

帰り道、坂道を上って行くと、お母さんが門口で心配そうに待っている姿が、遠くの方に見えました。

ご案内

次回は、7月29日(土)~30日(日)の予定です。北竜湖の森で観察小屋づくりを行い、キャンプをした翌日は小菅山登山という内容です。秋は10月22日(日)、歴史と文化に親しむための小菅の里オリエンテーリングを計画しています。

参加希望者は、瑞穂地区活性化センター(0269-65-2501)までお問い合わせください。

里山保全活動のスケジュール 2000年春・夏の予定

里地ネットワークでは、2000年度活動の柱のひとつに、里山保全活動支援を行っています。
イオングループ環境財団との共催事業を以下のとおり実施する予定です。

関心のある方は、日程を空けておいてください。

お問い合わせは、里地ネットワーク事務局まで。

詳細はもうしばらくお待ち下さい。

03-3500-3559

第1回 北竜湖・小菅の里プロジェクト

【場 所】長野県飯山市小菅

【日 時】平成12年4月15、16日(土・日)

=実施済み=

【共催団体】小菅むらづくり委員会

小菅の里協働楽舎



第2回 ヤマトタケルノミコト・白鳥綾の 石組を復活させよう

近自然工法、石組の技法を福留脩文先生から学ぶ

【場 所】三重県鈴鹿市

【日 時】平成12年6月17、18日(土・日)

【共催団体】鈴鹿里山倶楽部

〒513-8701 三重県鈴鹿市神戸1-18-18

鈴鹿市役所内

第3回 里山ぼうけん学校(仮称)

満沢集落の温泉探索、田んぼ、里山体験ツアー

【場 所】山形県最上郡最上町大字満沢

【日 時】平成12年7月22、23日(土・日)

【共催団体】最上の荘

山形県最上郡最上町大字満沢258

第4回 西和賀の里の文化体験と生活 たんけん隊

かやぶき民家に泊まって生活文化を体験
+ 地元学の実践

【場 所】岩手県西和賀郡(湯田町・沢内村)

【日 時】平成12年7月26、27日(水、木)

【共催団体】NPO法人西和賀文化遺産伝承協会

〒029-5615 岩手県和賀郡沢内村猿橋

19-25 広瀬方

第5回 『家庭学校』・食べる人がつくる 農業

家庭学校の建設と水路づくり、農場作り

【場 所】北海道紋別郡白滝村字白滝・おやじの村

【日 時】平成12年8月7日(月)~8月14日(月)

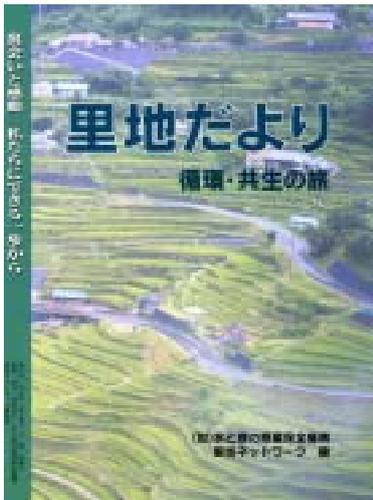
【共催団体】おやじの村

〒099-0111 北海道紋別郡白滝村字白滝

里地ネットワークの書籍・資料のご案内

里地テキスト第2弾

「里地だより～循環・共生の旅」



里地ネットワーク編
・発行、46ページ
頒価：500円(税込)
+送料：300円
環境総合情報誌「グリーン・ジャーナル」(日刊工業新聞社刊)に1999年2月から12月まで掲載された「里地だより」が1冊になりました。

全11回+里地ネットワーク概略

- 1) 満1歳を迎える里地ネットワーク
- 2) 環境を再生したまち 水俣
- 3) 愛知県美浜町「ふるさと研究むら」づくり
- 4) 熊本県小国町「悠木の里づくり」
- 5) 鳥取県智頭町「日本1/0村おこし運動」
- 6) 長野県四賀村 田舎と街の交流を深める小さな庭
- 7) 北海道標茶町「北の大地を訪ねて」
- 8) 三重県「ふるさと学」研修と人づくり地域づくり
- 9) イオングループ環境財団による里山保全活動
- 10) 鎌倉・青空保育「なかよし会」の取り組み
- 11) 旅での出会いと感動ー私たちにできる一歩から

里地テキスト第3弾

「エコシティーみなまたの歩き方」



熊本県庁企画、里地ネットワーク編著、合同出版発行、160ページ
頒価：1470円(税込)

進化した旅のかたち グリーンツーリズム入門
豊かな自然と 山の幸・海の幸.....
そして すてきな人びと
一度おいでよ、水俣に！

豊かな自然と、山の幸や海の幸に恵まれた水俣。持続可能な社会への再生・模索を続ける世界の「環境都市」ミナマタ。

それぞれの水俣に遊び・体験することで、自然と人間のありかた、自分の生き方を見つけます。

この「みなまた案内」は、修学旅行、人づくり・地域づくりをめざす人びとや、新しい旅の形を求める旅人のためのガイドブックです。

- 第1章 水俣で遊ぶ
- 第2章 水俣を食べる
- 第3章 水俣を知る
- 第4章 エコシティー水俣を歩く
- 第5章 あなただけの水俣グリーンツーリズム
- 第6章 グリーンツーリズムの背景 地元学
- 第7章 グリーンツーリズムを学ぶ
- 第8章 資料編

里地事務局へお申込み頂ければ、特典いろいろ！

特別頒価：1400円(税込・送料込)

里地ネットワークの理念・ツールをご紹介した下記資料をプレゼント

地元学リーフレットA3カラー版

里地ネットワーク理念パンフレットA3版

里地ネットワーク理念パンフレット

里地ネットワーク編・発行、A3版裏表

里地ネットワークは、循環共生型社会を目指し様々な人々との出会いを大切にするネットワークです。多くの人々との出会いの中から、私たちが模索している理念や習得すべき技術が、おぼろげながらも少しずつ明らかになってきました。この方向性に大きな示唆を与えていただいたアドバイザーおよび団体の9人(団体)の考え方を中心にまとめました。

地元学リーフレットA3カラー版

里地ネットワーク編・発行、A3版裏表

頒価：100円+送料100円

地元学からはじまる環境政策・住民参加・地域づくり。熊本県水俣市、愛知県美浜町、三重ふるさと学研修、岩手県湯田町での地元学実践の成果を紹介。地元学実践の手法を図や写真、設問の仕方などを簡潔に説明。地元学が地域を変える！

予告・里地テキスト第4弾

「地球温暖化対策から始まる 元気な地域づくり

里地からのチャレンジ100<1999年度版>
～里地地域における地球温暖化防止技術
・対策事例集～」(仮名)

頒価：未定

頒布予定：6月下旬

第1章 地球温暖化問題と里地地域

- 1) 地球温暖化問題とは？
- 2) 里地地域とは？
- 3) 地球温暖化防止に挑む里地地域
～都市にない5つの可能性～
- 4) 地球温暖化対策を地域経営に活かす
～4つのメリット～
- 5) 里地地域らしいチャレンジを目指す
～4つのコンセプト～

第2章 里地からのチャレンジ

- 1) 里地の温暖化防止アクション・リスト
- 2) アクションを可能にする技術・システム

- 3) 土地利用に応じたアクション・イメージ
- 4) 先進事例からの教訓
- 5) 今後の検討課題

第3章 実践事例100

- 1) エネルギーの地域調達
- 2) 「使い回す」生産文化～生産から循環まで
- 3) 「賢く使う」消費文化
～運輸・交通、ライフスタイル
- 4) 森林・緑化
- 5) メタン、亜酸化窒素対策

<参考資料>

- 1) 利用可能な補助制度
- 2) 里地地域で活用できる地球温暖化技術保有企業
リスト

ご案内

すべてのテキスト、リーフレットは里地ネットワーク事務局で取り扱っております。
電話・FAXにてお問い合わせ、お申し込みください。

また、里地ネットワークの会員も随時募集しています。この機会に、ぜひ里地ネットワークの活動を支え、ともに作りあげる会員参加をご検討ください。会員参加については、本紙最終ページをご覧ください。

里地ネットワーク事務局

電話：03-3500-3559

FAX：03-3500-3841

イベント・セミナーご案内

エコライフ・フェア2000

6月5日環境の日を中心に、6月は環境月間としていろいろな行事が行われます。渋谷では「循環社会 捨てずに生かす 新時代」をテーマに「エコライフ・フェア2000」が開催されます。里地ネットワークも子供から大人まで楽しめるプログラムで参加します。みなさんぜひ遊びに来てくださいね。

日時：6月10日(土)～11日(日)・10:00～17:00

場所：東京都渋谷区・代々木公園・園路
(NHKホール前)

主催：エコライフ・フェア2000実行委員会

ホームページ <http://www.eic.or.jp/eanet/ecolife-fair>

問い合わせ：環境庁広報室

TEL03-3581-3351(代)

妖怪の森プロジェクト

弘川寺 歴史と文化の森にササユリを増やしていく活動、そしてその管理を年間通じて行っていく活動を妖怪を基本テーマとしてイベントが組まれています。

日時：7月2日(日) 昼の森で下草刈りと琵琶の語り

8月26・27(土・日) 夜の森で妖怪と対決。下草刈り

場所：弘川寺(大阪府南河内郡河南町)

連絡先：大亦義朗

TEL & FAX 0721-63-3647

なべくら高原「森の家」イベント

森を育てる

視点を変えて森を見る林内遊歩道作り

安全で、雨雪でも壊れない丈夫な歩道の作り方を学びましょう。実際になべくら高原内に遊歩道を作ります。

日時：6月25日(日) 10:00～16:00

炭焼き・夏野菜ピザ体験

炭焼きをして炭をかき出した直後の熱々の窯でピザ焼

きます。地元で採れたての夏野菜を堪能してください。
(事務局注：この方法は愛知県美浜町の白炭窯づくりの時に体験しましたが、絶品です！)

日時：7月11日(火) 10:00～13:30

平成ほたる絵巻 源氏蛭・平家蛭

蛭鑑賞と田んぼ体験、美味しい食べ物も味わって、里山の環境について考えましょう！

問い合わせ：なべくら高原「森の家」

(長野県飯山市) TEL0269-69-2888 FAX0269-69-2288

地球デザインスクールイベント

湿地のビオープ教室

日本一小さいトンボ=八丁トンボや、モリアオガエルあるいはモウセンゴケなど公園の湿地に暮らす生き物たちを調べながら、その湿地そのものを守る方法を実際に体験。

日時：6月24日(土)・25日(日)

夏休みいきなり生き物探検

地球デザインスクールの公園にはいったいどれだけの動物、昆虫がいるか、さまざまな仕掛けを使って、調べて、夏休みの宿題を完成させちゃおう。

日時：7月21-23日

場所：いずれも波見の里センター(京都府宮津市)

問い合わせ：地球デザインスクール事務局

(担当：広瀬) TEL075-417-3147 FAX075-431-8376

第2回森づくりミーティングフェスタ

森林の多様な機能を活用して～里山・バイオマスエネルギー・循環型社会・あそび・環境教育・いやし森林にかかわる全国の行政・企業・NPOなどの事例発表や、テーマ別分科会、活動フィールドを実際に使った体験プログラムも実施。

主催：トヨタ自動車株式会社、(社)日本環境教育フォーラム

日時：7月1日(土)～2日(日)
場所：ホテルフォレスト/フォレストヒルズモデル林
(愛知県豊田市岩倉町一本松1-1)
申込期限：6月12日(月)
問い合わせ：エコのもりセミナー事務局
担当：青木・黒岩 TEL03-3475-7738 FAX03-3475-7739

キープ協会イベント

第28回森を育てる週末実習隊

テーマ：小さな樹上動物のための「空中の小道」づくり～空中に枝などを渡して“道”を作る～
日時：6月24日(土)～25日(日)

第5回環境教育施設社セミナー

内容：「自然ふれあい施設」のソフト部分(プログラム開発・人材育成)の計画から実施までを学ぶ
日時：7月4日(火)～7日(金)
講師：小河原孝生(生態計画研究所)

第3回自然と遊び、牛を飼うたいけんキャンプ

内容：自然体験・酪農体験
日時：7月15日(土)～16日(日)
対象：家族・親子

第2回環境教育指導者のための体験学習法セミナー

内容：環境教育には欠かせない教育手法のひとつ「体験学習法」を学ぶ
日時：7月26日(水)～29日(土)
講師：西田真哉(聖マーガレット生涯教育研究所)

問い合わせ：(財)キープ協会 キープ・フォレスターズ・スクール

TEL0551-48-3795 FAX0551-48-3228

姫田忠義による「映像と基層文化」論

民族文化映像研究所 アチック・フォーラム20周年記

念特別プログラム～民映研 未来へのメッセージ～

里地セミナーで講義をして戴いた民族文化映像研究所の姫田所長による、1カ月ごとにテーマを決め、基層文化の講義と上映とを組み合わせせたプログラムです。

各月のテーマ

2000年

- 5月 それは旅ではじまった。旅人の系譜と映像的記録作業の系譜。
- 6月 山に行かされた生活と信仰。基層文化の脅威1 越後奥三面に学ぶ。
- 7月 アイヌ民族との出会い。民族の存在と映像的記録作業の深化。
- 9月 アイヌ文化の独自性と普遍性。作品「イヨマンテ～熊おくり～」
- 10月 焼畑は自然破壊ではない！基層文化の驚異2 焼畑文化に学ぶ。
- 11月 海から生まれた家族。基層文化の驚異3 漁労文化と若者宿。
- 12月 猿も家族である！基層文化の驚異4 猿まわしの復活、野生との共生、芸能

2001年

- 1月 けんらんたる生活工芸。基層文化の驚異5 木地師、丸木舟など。
- 2月 これが日本か！基層文化の驚異6 狩猟文化と信仰。
- 3月 映像文化よ、いずこへ！
300チャンネル時代を担う。

会場：民族文化映像研究所

日時：毎週金曜日 18:30開場 19:00開始

参加方法：月会費制

問い合わせ：民族文化映像研究所

アチック・フォーラム

〒160-0022 東京都新宿区新宿2-1-4 御苑ビル2階

TEL03-3341-2865 FAX03-3341-3420

<http://www.tk.xaxon.ne.jp/mineiken/>